



千葉白菊会会報

第61号

令和7年3月発行
(2025)

就任のごあいさつ

千葉白菊会 会長 青柳 信子

大澤國昭・前千葉白菊会会長が令和六年三月で退任され、四月から私が第五代会長の任に就くこととなりました。

私と白菊会との関わりは、平成十七年から六年間、千葉白菊会事務局長を務めた時からです。千葉大学医学部の非常勤職員として、入会手続きをしたり、会員の電話を受けたりしていましたので、皆様の中には総会でお会いしたり、電話でお話した方もいらっしゃるでしょう。当時は丸山武文第三代会長でしたが、役員の皆さんは、大学の役に立ちたい、学生さんのお手伝いがしたいと一生懸命で

した。「献体の碑」周辺の草取りや千葉寺霊堂の掃除などに汗だくで取り組んでいらっしやったことを思い出します。

平成七年に献体された齋藤利一初代会長は直接存じ上げないのですが、自衛隊で同僚だった山内實元副会長から折に触れお話を伺っていました。また、山内彰吉第二代会長には毎年、総会でお会いしていました。

大澤國昭第四代会長は、監事として七年、副会長二年を含め二十三年間、千葉白菊会と千葉大学医学部の為にお骨折り下さいました。十四年もの間、会長を務められた大澤前会長のようには出来ませんが、微力ながら精一杯務めさせて頂きますので、どうぞよろしくお願い致します。

目次

成願者名簿……………1

ご遺体の先生に寄せて……………3

医学部学生感謝のメッセージ

看護学部学生感謝のメッセージ

ご遺族様からのメッセージ……………15

令和五年度千葉白菊会活動報告……………17

解剖実習ガイドンス

献花式 名簿奉納式

白菊の広場……………18

私と献体・会員からのお便り

お知らせ……………20

Q & A……………21

ご家族の方々へ……………23

発行 千葉大学医学部
千葉白菊会

〒260-8670
千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
TEL 043-226-2988

印刷 株式会社正文社
〒260-0001
千葉市中央区都町1-10-6
TEL 043-233-2235

成願者名簿

令和五年四月一日から令和六年三月三十一日まで、九十六名の会員が成願じょうがんされました。
謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

(注) 千葉大学に献体(成願)された年月日を記載しています(ご逝去された日ではありません)。

故	遠山 奈須男 様	千葉市中央区	98歳
故	田代 四郎 様	山武市	89歳
故	地湧 宏 様	船橋市	85歳
故	塚谷 節子 様	千葉市稲毛区	81歳
故	小島 幸江 様	千葉市稲毛区	98歳
故	安次嶺 保義 様	市原市	87歳
故	佐藤 孝 様	八千代市	95歳
故	高井 辰子 様	船橋市	94歳
故	岡田 光子 様	夷隅郡御宿町	93歳
故	榎本 郁郎 様	八千代市	90歳
故	寺田 良寛 様	船橋市	88歳
故	小柏 每子 様	山武市	83歳
故	児井 政子 様	市川市	100歳
故	前田 芳孝 様	君津市	90歳
故	金吉 法道 様	夷隅郡大多喜町	78歳
故	津波 宏和 様	流山市	85歳
故	草野 繁夫 様	八千代市	80歳
故	藤谷 登 様	千葉市花見川区	84歳
故	小滝 千代 様	館山市	95歳
故	鈴木 修 様	松戸市	92歳
故	加藤 弘信 様	館山市	80歳
故	布施 仁十郎 様	船橋市	94歳
故	上段 宏彰 様	東京都	75歳
故	宮本 朋子 様	茨城県	80歳
故	清水 貞治 様	山武郡九十九里町	89歳
故	田中 京子 様	富津市	94歳
故	富田 真子 様	千葉市緑区	64歳
故	大矢 正 様	長生郡長柄町	87歳
故	川名 喜美子 様	木更津市	97歳
故	富澤 勇治 様	千葉市花見川区	87歳
故	内田 幸子 様	柏市	97歳
故	阿部 一浩 様	佐倉市	62歳
故	稲村 宰代 様	柏市	89歳
故	岡田 稔 様	四街道市	66歳
故	飯島 保子 様	千葉市花見川区	90歳
故	峯岸 恵美子 様	千葉市若葉区	92歳
故	小杉 利子 様	松戸市	88歳
故	間々田 佑子 様	習志野市	81歳
故	渡邊 富榮 様	船橋市	94歳
故	松宮 教子 様	船橋市	95歳
故	加藤 郁也 様	千葉市緑区	76歳
故	竹内 和男 様	流山市	87歳
故	飯田 格 様	船橋市	102歳
故	武田 和子 様	船橋市	79歳
故	龍 敬一 様	木更津市	84歳

故	並木 清 様	鎌ヶ谷市	94 歳
故	矢部 英一 様	千葉県中央区	83 歳
故	向山 幸夫 様	佐倉市	87 歳
故	望月 進一 様	松戸市	75 歳
故	前岡 史栄 様	大網白里市	70 歳
故	諸石 八千代 様	船橋市	66 歳
故	佐久間 淳子 様	千葉県若葉区	76 歳
故	石橋 忠 様	船橋市	91 歳
故	塩澤 洋子 様	船橋市	86 歳
故	坂本 恵一 様	茨城県	86 歳
故	齋藤 麗子 様	松戸市	87 歳
故	林田 はつ 様	千葉県花見川区	94 歳
故	日方 寛 様	茂原市	95 歳
故	秋山 千里 様	松戸市	91 歳
故	加藤 友彦 様	柏市	93 歳
故	大濱 富三 様	木更津市	90 歳
故	岩戸 輝雄 様	流山市	96 歳
故	丸田 幸雄 様	市原市	76 歳
故	弓削 とよ子 様	東京都	84 歳
故	渡部 正廣 様	松戸市	87 歳
故	岡 涼子 様	市原市	89 歳
故	平野 寛一 様	八街市	86 歳
故	竹内 貞 様	船橋市	95 歳
故	西尾 憲司 様	千葉県若葉区	82 歳
故	赤坂 カツエ 様	習志野市	96 歳
故	奥山 さく子 様	山武郡九十九里町	89 歳
故	久根崎 克美 様	鴨川市	61 歳
故	湯浅 綾子 様	松戸市	89 歳
故	佐藤 ユキノ 様	君津市	93 歳
故	中村 實 様	市原市	91 歳
故	近藤 妙子 様	千葉県美浜区	95 歳
故	豊田 たみ子 様	千葉県花見川区	98 歳
故	高松 鐵郎 様	山武市	79 歳
故	安藤 ゆき子 様	富津市	89 歳
故	赤坂 千代子 様	船橋市	90 歳
故	福島 久代 様	船橋市	82 歳
故	中山 令子 様	いすみ市	82 歳
故	渡部 卓朗 様	八千代市	90 歳
故	宮寺 廣 様	千葉県稲毛区	97 歳
故	佐藤 忠義 様	千葉県稲毛区	79 歳
故	山下 由紀子 様	船橋市	81 歳
故	池田 稔 様	千葉県中央区	78 歳
故	宇賀神 俊一 様	千葉県稲毛区	79 歳
故	野本 芳雄 様	千葉県中央区	94 歳
故	岡 正男 様	市原市	89 歳
故	朝賀 治雄 様	千葉県中央区	90 歳
故	荒武 國治 様	千葉県美浜区	90 歳
故	阪田 ミヨ子 様	市原市	101 歳
故	坂本 利子 様	習志野市	99 歳
故	深山 弘邦 様	茂原市	82 歳
故	中沢 博 様	茨城県	90 歳

ご遺体の先生に寄せて

解剖実習を行った医学部学生、見学に参加した看護学部学生たちからのメッセージをお届けします。皆、この授業を通じて真の医学生・看護学生となり、そして良き医師・看護師となる決意と、献体者への感謝を表明しています。

医学部学生感謝のメッセージ

解剖実習を経ての成長と感謝

八木 悠輔

はじめに献体をしてくださった方々、ご家族の方々、私たちに貴重な解剖実習の機会をくださり本当にありがとうございます。解剖実習がさまざまな意味で医学生にとって不可欠であることを、私は実習を経て痛感しました。

まず実際の手術では、極力患者さんの傷を少なくするために切開範囲は最小限で行われます。あらかじめ見たい血管や臓器などが明確に剖出※され提示されて

いるアトラス※や図とは違い、本当の臨床の現場で求められる知識というのは体表からどう見えるかということや構造物の深さ、さらには他の構造物との関連であり、ご遺体を実際に目で見て解剖させていただくことによりこれらをより深く理解することができました。また、神経や血管などもアトラスの図では色分けされていて分かりやすくなっていますが、実際の体だと他の組織や繊維などと区別がつかず最初は神経一本剖出するのにならり時間がかかりました。しかし解剖実習が終わりに近づくにつれて剖出能力、識別能力ともに大変成長し、すぐに見つけることができるようになりました。さらにご遺体で、気管挿管※や胸腔ドレナージ※などの外科的手技も体験させていただきました。縫合などの基本的な手技をはじめ、中には実際の医師でもたまにしか行うことのない貴重な手技も体験させていただきました。手技は一回やっているかそうでないかでは実際に行うときに雲泥の差であり、非常に有意義なものでありました。

また、解剖実習を経て医学的知識以外にも大きく成長することができました。

二年生になり専門的な医学の授業が本格的に始まったばかりで、さらにそれらの多くは基礎医学的な側面が強く、医者になるということはどういうことかをあまり理解しておりませんでした。解剖も医師になるために必要な勉強のうちのひとつとしか考えていませんでしたが、解剖実習を経て、献体してくださった先生方の自分たちに体を預けてくれるという行為から、その行為や体を預けてくださった方に対して真摯に向き合わなくてはならない、ということを学ぶことができました。これは、医師を信じて体を預け侵襲的※な医療行為を許してくださる患者さんと医師の関係そのものであり、初めて医師とはどういう職業か実感できたように思えます。自分たちの勉強のために献体してくださった方のためにも、しっかり学ばせていただいたことを糧に、今後も精進し立派な医師になり多くの人を救うことが、自分たちにできる恩返しであると思っています。

献体してくださった方、そのご家族の方々は、亡くなられてからも長い間解剖を待たなくてはいけないということを聞きました。長い間、ご家族の元に戻れな

かったご遺体の先生、そして亡くなられた先生と長い間離れ離れになってしまったご家族の方々には、頭が上がりません。改めて献体してくださった方々、またご家族の方々に心より御礼申し上げます。

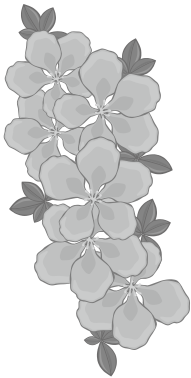
※剖出……見るべき器官が見えるように他の組織を取り除くこと

※アトラス……解剖実習で使用する人体の図譜

※気管挿管……口や鼻から気管チューブを挿入して気道を確保する医療行為

※胸腔ドレナージ……肋骨・胸骨・横隔膜などによって囲まれ心臓・肺などを収める胸腔に、管（ドレーン・カテーテル）を挿入して感染症の原因となる膿・血液・浸出液などを排出する治療行為

※侵襲的……手術や器具の挿入など、身体に負担をかけるようなこと



献体してくださった先生へ

宮野 ひなた

三ヶ月の解剖実習が終わりました。この三ヶ月は私にとって、人生の中で最も濃い時間のひとつだったと思います。この三ヶ月を通して、ご遺体の先生は私に非常にたくさん、とても大切なことを教えてくださいました。

まず初めに、先生は私に医学の根本である、人体構造の知識を刻み込んでくださいました。教科書の図や写真で見ると、実際に剖出し同定をするのでは、知識の定着に雲泥の差がありました。自分の目で見て手を動かし、それらを一つ一つ剖出していくことで、立体構造を身体で覚えることができました。解剖実習が始まる前までは、「胃はこの辺にあるのかな」などといった曖昧なイメージしかなく、血管や神経などの細かい組織の実態も、ほとんど想像ができませんでした。それが今では人体全体の構造、組織どうしの関係性、それぞれの持つ機能まで、頭の中で詳細に思い描くことができるようになった、世界の見え方がまるで変わりました。

した。医学部で学ぶ他の科目も、人体の構造が頭に入っているために格段と理解がしやすくなり、医学を学んでいる実感が湧くようになりました。

先生が教えてくださったのは、教科書に載っているような一般的な体の構造だけではなくありません。教科書とは違った構造もいくつか見つかかり、中には専門の先生も「このような形は見たことがない」といって興味を示すような珍しい構造も目にすることができました。この経験を通して私は、人はみんな違うのだ、というのを改めて実感し、臨床の現場で一人一人の患者さんと個別に向き合うことの重要性を考えさせられました。

そして、これらの学習面における知識だけでなく、医師とは何たるべきかという精神を教えてくださいましたのも先生です。体を張って私たちに学びの機会を与えてくださったという先生の意思を決して裏切つてはいけない、という思いで、どんなに大変でも実習前の予習は欠かさず行い、実習中は少しでも多くのことを吸収しよう、とにかく剖出に励みました。そこには「患者さんの期待に応えなければ」という医師としての義務、責

任感と似たものが芽生えていたように感じます。剖出は単純なものばかりではなく、自分は的外れなことをしているのではないか、と不安を抱えながら作業を進めることもありました。しかしそんなとき、ふと自分が探している組織が現れてくることが何度もありました。それはまるで、先生が私を導いてくれているかのようにでした。振り返ってみるとここには、「医師は患者さんに支えられている」という関係性が体现されていたように思います。医師が患者さんに対して持つべき責任は、とても重いものであり、その上で私は医師になるのだという覚悟を持つと同時に、医師は患者さんに奉仕しているだけではない、与えられているのだ、ということを感じました。だからこそ、私たち医師は常に患者さんに対して誠実であり続けなければならぬのだと思います。

解剖実習は紛れもなく、私が医師として行う初めての医療行為でした。そしてご献体してくださった先生は、私がメスを入れさせていただいた最初の患者さんであり、医師になるにあたって必要なたくさんのことを教えてくださった恩師であり、私の心の中に残り続け、これから

の医師としての私の人生の「道しるべ」となる、かけがえのない存在です。自分の身を削って、医学の発展に貢献しようという先生の尊い精神に応えるべく、私は立派な医師になってこれからも精進していきます。最後に、私たちを信じて献体してくださった先生、そしてその機会を与えてくださったご遺族の方々に深く感謝申し上げます。

ご献体者へのおもひ

中村 誠太郎

私はこの度、昨年の十月から三ヶ月に渡り、解剖実習に励ませてもらいました。非常に貴重な学習の場を与えてくださったご遺体の先生やご遺族の方々、そして千葉白菊会の会員の皆様にはまず感謝の意を表明します。私はご遺体を解剖させていただくこの貴重な機会を通して、医学の知識を超えた貴重な経験をさせていただきました。今回の解剖実習で、私は人間の身体を尊重し、人間性や倫理に対する理解を深めることができたと考えています。また生と死についての

考えを深めることができ、患者さんに対する敬意を培うことができたと考えています。これらの、医師として一番大切であると考えられることを学ぶことができ大変感謝していると同時に、これらを忘れることなく、今後の医師としての人生に活かしていきたいと深く考えています。

人間性と倫理の理解以外にも、今回の解剖実習でたくさん学ぶことができました。この解剖実習で得た学びは、教科書や通常の授業で学ぶものとは全く異なるものでした。教科書は抽象的な概念や理論を伝えるものであるのに対し、解剖実習ではご遺体を解剖させていただくことで、人間の解剖学的構造や臓器の相互関係、臓器の機能や役割など、様々な人体についてのことを直観的に学ぶことができました。また、解剖実習を通して解剖学が医療にとつて不可欠なもので、医療の核を担うものであると認識できました。今回の解剖実習では私たちのみでなく、様々な専門の医師の方々も見学に來られました。そこで既に医師になられた方々



も、手術、診断、治療計画などの臨床的な応用に対しても、解剖学の理解が必要と述べられていました。私はまだ専門的なことは理解することができませんが、今回の解剖実習で、今の段階で学べる特別なことは最大限学ぶことができました。

特に自分の中で印象に残っているのは、実技の練習の際の救急科で用いる気管挿管です。気管挿管は在学中に教科書で学ぶこと以外で触れる機会はなく、この実習の後は、実際の患者さんを相手にすることになるとのことでした。気管挿管は人の生死に直結する非常に大切な実技であり、その実技の体験をさせていただいたことが非常に印象に残っています。このように私は、今回の解剖実習では、ご遺体を提供してくださった方々のおかげで、貴重な学習の機会のみでなく人間性や倫理にも触れることができ、より豊かな視点を得ることができました。

最後になりましたが、この貴重な経験を通して学んだことを将来の医療現場で活かし、ご献体者の方々に報いることができるような医師に成長していきたいと考えております。貴重な経験を与えてくださり心から感謝を申し上げます。



「感謝」

福留 京華

まず初めに、献体してくださった先生に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

医学部に入った当初から、さらには医学部に入ることを目指していた高校生の頃から、「解剖実習は、憧れである医師のようなことを初めてできる場」だと考えておりました。そのため、二年生になって夏休みも終わり、いよいよ解剖実習が始まるという時には、緊張した気持ちとともにやっと解剖実習に参加できることに喜びを感じていました。その頃はまだ「将来医師になる立場としてあるべき姿勢」や「献体してくださった先生を解剖させていただくことの重み」について分かっていたつもりだったものの、恥ずかしながらあまり深く自覚は出来ていなかったように思います。

実習が始まる前の解剖倫理講習では、解剖実習を行う上で、さらには将来医師になる上で自覚しなければならぬことについて多く学びました。医師が手術を



担当した患者の肝臓に自らの名前のイニシャルの焼印を入れた事例や、複数人の医師がご遺体の前で写真を撮ってSNSに掲載した事例を耳にして、「医師になる人間が傲慢であってはならない」ということを改めて深く実感させられました。一般的に、「医師になることは難しく、医師は素晴らしい職業だ」という考えが浸透しているように思います。実際、私自身も周りの人々から「医学生だなんて、優秀で凄いな」といったお褒めの言葉をもらうことも少なくありません。そのような背景もあり、数々の努力を経てやっと憧れの医学部に入った自分をどこかに特別に感じてしまっていた節があったように思います。先ほど述べたような事例ほど極端ではないものの、「自分をどこか特別な存在だと認識する」ということは「傲慢である」とことほとんど等しいことだと感じ、そんな自分を恥じて深く反省しました。このような過程を経て、「傲慢さを一切捨てて、社会に貢献するために努力しなければならぬ身である」ということを自覚してから、解剖実習が始まりました。

解剖実習初日、ご遺体の先生を目の前にして思わず涙が出そうになりました。

私は、ご遺体の先生がどのような方なのかは知ることができませんが、医学生のためにも自らのお身体を献体してくださることも優しい方だ、ということだけは分かり、そんな先生の優しさに心を打たれたためです。献体してくださった先生のご期待に添うべく、一生懸命勉強しなければならぬ、と一層気が引き締まりました。

三ヶ月間の実習の中で、医学の基礎となる人体の構造について深く学ばせていただきました。さらには、気管挿管など複数の実技実習も行わせていただき、大変勉強になりました。「百聞は一見にしかず」という諺の通り、教科書で学ぶだけではすぐに忘れてしまったり曖昧になっていたと思われる所も、実際に観察したることによって、今この瞬間も鮮明に映像が浮かぶほどしっかりと自分の知識にすることができました。この解剖実習を経て人体の構造に関する知識が身についたことで、実際に医学の勉強が以前と比べて、格段に理解しやすくなったと実感しております。

このように、医師になる上で必要な姿勢や知識について深く学ぶ貴重な機会を与えてくださったご遺体の先生と、ご遺

族、また千葉白菊会会員の方々には深く感謝しております。この恩を一生忘れることなく、社会に還元できるような医師になれるよう、今後も謙虚に努力を重ねて参りたいと思います。本当にありがとうございました。

解剖実習を終えて

濱口 大地

二〇二三年十月六日。私はこの先、一生この日を忘れることがないだろう。解剖実習室に入った瞬間が、今でも私の記憶に鮮明に刻まれている。

解剖実習を始めるにあたり、私には二つの相反する気持ちがあった。それは、初めて実際のご遺体の先生を直接観察して勉強することができるという期待や興奮と、果たしてそれを無事に終えることができるのかという不安である。二年生となり、いよいよ基礎医学の勉強が本格的に始まっていく中で、特にこの解剖学実習は私にとって印象的であり、解剖を学習している一日一日が新鮮であった。

解剖実習を始めるにあたり、さまざまな

注意事項や医療倫理、プロフェッショナルリズムを学ぶ機会もあった。その中で印象的だったのは、市民の死者に対する敬虔な感情は昔から変わらないということだ。医学生がご遺体を解剖して学習することに対し、不快感を含めた複雑な感情を抱く人々も少なからずいる中で、医学生がご遺体から学ばせてもらっているというのを忘れてはいけなと感じた。私は、この解剖実習という授業が当たり前に行われているのではなく、数多くの人々の支援があつて成り立っていることを実感するとともに、一学生として、この解剖実習に対する責任感が強く芽生えたように思う。

そのような中で、いよいよ実習が始まった。白布を剥がしてご遺体の先生と対面し、いざメスで皮膚を切開するとなった時には、さすがに恐怖感を抱いたのを覚えていいる。しかし、座学で学んだことを実際に見て、触れて学ぶことができるということに感動し、無我夢中で解剖実習の行程を進めていく中で、いつのまにかその恐怖感も薄れていったように思う。いつしか班のメンバー一人一人がご遺体

への愛着をもつて実習を進めていた。

次に、この解剖実習で得られたこと、学んだことを主に二つ挙げたいと思う。一つ目は、実際の座学では学べないようなことが、実際には頻繁に起こりうるということである。例えば、血管や神経などに破格※があるのは日常茶飯事であり、臨床ではその破格に対しても、当然同じ質の医療の提供が求められる。それが原因で医療ミスを起こすことは、当然許されない。臨床現場ではそのようなことにも細心の注意を払い、特に外科手術の際には、どの医療分野の先生も、解剖の知識を存分に使いながら臨機応変に対応しているということを実感した。二つ目は、実際の患者さんに対する上での心構えである。解剖の先生が話されていたことで印象的だったのが、「ご遺体の先生が私たちにとって初めての患者さんである。」というものだ。私はその言葉を聞いて、より一層ご遺体の先生に愛着や責任感を持つようになったと共に、ご遺体の先生のご家族や周りの方々のさまざまな思いを背景に感じて実習に取り組むようになった。今後、実際に私が医療現場に出る際にも、この初心を忘れずに励

んでいきたいと思う。

最後に、私たちの実習のために献体してくださった千葉白菊会の皆様およびご遺族、教員の方々をはじめ解剖実習に関わってくださったすべての方々に感謝申し上げます。この実習を通して得たことを胸に、これからも精進して参ります。本当にありがとうございます。

※破格……形態的には異常でも機能的には正常なこと

解剖実習を終えて

湯村 綾

解剖実習が始まる数日前から、私はとても緊張していました。長期にわたる実習期間、膨大な知識量、そして何よりも、人の体に初めて触れることが怖くて、不安だったのを覚えています。初めての実習の授業では、献体してくださった先生に対して、本当に自分がこれからメスを入れるのかと、とても不安でした。

実習が始まって最初のころは、どうか実習をこなすので精一杯でした。それ

と同時に、献体してくださった先生に対して、「どうしてご遺体の先生は自身の体を献体すると決めたんだろう」「私が亡くなる時に、最期の時まで、自分の体を誰かのために使いたいと思えるだろうか」と考えるようになりました。実習中は集中していてあまり意識していませんでしたが、今考えると、私は解剖実習を通してかけがえのないものを学び、身に付けたと思います。

まずは、人の体に触れることの責任の重さです。実際の医師は、人を救うためにメスを使います。解剖実習中、医療行為は人の体を傷つける行為でもあるのだと意識する機会が多くありました。そのため、医療行為を行う際は細心の注意を払う必要があるし、失敗は許されないのだと実感するようになりました。解剖実習中に行われたテストで、CT画像をうまく読むことができず、私たちの班も含め学生の半分くらいが間違えた問題があった時、教員の先生が「半分くらいが間違えたので、半分くらいの患者さんしか助からない」と仰った事がありました。その言葉を聞いた時、「ご遺体の先生から学んだことを活かしていない」

「献体して下さった先生の思いに背いている」と感じ、自身の解剖実習への姿勢を見直す事が出来ました。実習中は、周りの方々が学生ではなく一人の医療従事者のように接してくださったおかげで、より一層責任感を持つことができたと感じています。

次に、チームワークです。実習を進めていく中で、「同じ医学部の学生で、同じ年くらいなのに、こんなに価値観が違うのか」と驚いた事が何度もありました。実習への向き合い方や知識量、技術の習得の速さなど、様々な事が班員それぞれ異なっていました。他の班員が出来ている事が私だけ出来なくて落ち込んだり、考え方の違いに苛立ったりした事もありました。しかし、実習を進めていく中で、それぞれの班員の中に学べるところ、尊敬すべきところが沢山ある事に気づき、自分が助けられていた事を実感しました。他者から学ぶ姿勢は、医師となる上で欠かせないものですが、医療の知識のように授業を受けて得られるものではありません。頭では分かっている、実行に移すのが難しい事でもあるので、実習を通して経験できる貴重な機会だったと考えています。

たと考えています。

私は、「自分が亡くなる時まで、自分の体を誰かのために役立てようと思えるだろうか」と実習中にずっと考えていました。私だったら、医学生のためになると分かっていても、とても葛藤すると思います。だからこそ、会った事もない医学生のために献体して下さったご遺体の先生や、千葉白菊会の方々、環境生命医学の先生方には、感謝してもし切れません。改めまして、環境生命医学の先生方、千葉白菊会の皆様、そして献体して下さいました先生およびご遺族の方々、本当にありがとうございました。解剖実習を終えてようやく、医師としてのスタートを切れたように感じています。解剖実習で得たものを活かし、一人の医療従事者として学びながら成長していこうと思います。

ひとりひとりが 違うということ

草刈 綾大

この度は、千葉白菊会の会員の方々、そしてご献体いただいたご遺体の先生

に、深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。約三ヶ月にわたる解剖実習を終えて、私は多くのことを学びました。膨大な肉眼解剖学の知識以上に、様々なことを習得することになったと感じています。

ひとつは、自分が医学生として、引き返すことのできないところまで来た、あの意味では一線を越えた、という実感です。他人の身体にメスを入れ、傷をつけるという行為は、医師にしか許されていません。それはご遺体の先生に対しても同じことですが、私たちは今回の実習で、特別にそれが許されていたと考えています。献体いただいた先生の身体で学ばせていただくことは、私たちがこれまでに医学生として様々なことを学んできたこと、そしてこれからも知識や技術を身に付け、将来医師として人々のためになる人間に成長していくことを前提にしたものであり、私たちはその期待と責任に応えなければいけない、それがご遺体の先生、そしてご遺族の皆様に対する誠意と感謝の示し方なのだと感じました。

解剖実習を進めていくうえで、自分の班のご遺体だけでなく、周りの班のご遺

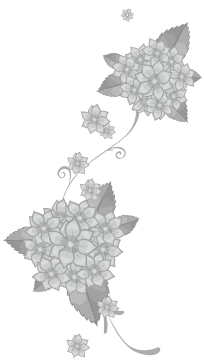
体を観察させていただく機会が何度もありました。そこで強く実感したのは、ひとりひとりの身体がいかにか違っているかということでした。性別による差だけでなく、ご遺体の先生の間で、血管の分岐の違いなど身体の構造に個性があるのと同時に、手術を受けた痕跡などがある方もいました。ひとりひとりが歩んできた人生の違いが反映されているような気がして、そのときに私はそれまで以上に、この解剖実習が、千葉白菊会の方々の尊い精神、そして多くの、ひとりひとりの、ご献体いただいた先生によって成り立っているのだということ強く実感しました。

実習期間中、同級生と、「身体の構造すら個人個人でこれだけの差があれば、考え方や価値観がひとりひとり違うのも当然な気がするね」、という話をしたことがあります。同じヒトでも、ひとりひとりが大きく違っているのです。このことが、私にとってこの解剖実習を通して最も強く心に残っていることです。実習が終わったのち、肉眼解剖学の先生から、これから医師となった時に、「自分と相手は違う考え方を持っているということ」を認める」という意味での「共感」

が大切だ、というお話を頂きましたが、その第一歩を、この解剖実習を通して学ぶことができたように感じます。

人体の構造をただ学ぶだけなら、教科書を読んだり、模型を観察したりするだけでいいはずです。ですが、そのようにして学んでは、ひとりひとりの違いに気が付くことはありませんでした。確かに教科書には、様々な身体の構造について、いくつかのレパートリーがあることも記載されていますが、身をもってそのことを体感することこそ大きな意義があり、個人の価値観や考え方の違いにまで考えが至ることになった理由だと考えています。

実習を通して、様々なことを学ぶことができたのは、ひとえにご献体いただいたご遺体の先生、ご遺族や千葉白菊会の皆様のご協力あつてのことです。医学生として大きく成長することができました。本当にありがとうございます。



見守ってくださった先生と 支えてくださった皆様へ

山田 彩日

「本日もよろしく願います。」とご遺体の先生に心の中でお伝えし、黙祷することから私の毎回の実習は始まりました。

一番初めの授業で「解剖実習への慣れ」について話を聞いたとき、自分が自分でなくなってしまうような恐ろしさを感じました。そこで、初めての黙祷の時に頭に浮かんだこの言葉を、初心を忘れないように毎回の実習でお伝えすることになりました。このおかげもあってか、実習中は先生が近くで見守ってくださっているような気持ちになりました。

始めの頃こそ慣れない実習に戸惑う事もあり、余裕のない日もありました。しかし、日を追うにつれ、ご遺体の先生の生前のお姿や暮らし方が想像されるようになりました。特に、私が担当させていたいただいた先生は、大きなご病気で亡くなったとは伺っていなかったため、お身体の不調を見つけた際には、日々の生活

にどんな影響があったのかを考えずにはいられませんでした。

目の前にいる先生が何をきっかけに献体について知り、献体を決意されたのかを私たちは直接知ることは出来ません。しかし、そこに確かに存在した先生の崇高な意思が、実習に取組む背中を押してくださるような気持ちになりました。

もちろん、実習の中で人の身体の多様性や共通性など、知識の面で習った事も多くあります。しかしそれ以上に、医師と患者との関係や接し方、身体を預けていただけるに足る人間性について考えさせられたように感じます。

そして、ご遺体の先生を棺にお納めする際、ふと、先生と同じ頃に亡くなった母方の祖父のことを思い出しました。祖父の病理解剖を打診されたとき、母は一瞬逡巡し、「もう十分頑張りましたからこれ以上は（お断りさせてください）」と言っていました。当然の気持ちだと思います。おそらくご遺体の先生が生前にご家族に献体の意思を伝えた際や、実際にお亡くなりになった際に、同じように不安や当惑を感じたご家族も多くいらっしゃるかと存じます。しかし、ご家族の

ご協力を無くしては先生とお会いするとは叶いませんでした。

自らのご遺体は無条件・無報酬のもとに医学のためにご提供いただいたいき、そして私たち学生にまたとない貴重な経験を与えてくださったご遺体の先生と、ご理解いただいたご家族の皆様、そして白菊会の皆様に心より感謝申し上げます。まだまだ学ぶことの多い未熟な身ではございますが、実習で学んだ知識と気持ちを忘れずにこれからも精進して参ります。本当にありがとうございます。

そして、担当させていただいたご遺体の先生へ。もしよろしければ、これから見守っていていただけるよう、よろしくお願い申し上げます。



看護学部学生感謝のメッセージ

たったひとつのかけがえのない命に寄り添うこと

財津 香絵

人体解剖見学を始める前に、全員で黙とうを捧げました。その時、お一人お一人のご遺体はかけがえのないたったひとつの命で、ご家族の方々の同意があつてはじめて解剖をさせていただくことができるのだと感じました。そしてご献体くださったご本人とご家族のお気持ちに沿えるよう、学び成長しなければいけないと感じました。同時に、私たちが医療者になった時に接する患者さん一人ひとりも、かけがえのないたったひとつの命であることを忘れてはならないと教えられた気がします。

私は、解剖見学をさせていただき、人体の構造を立体的にとらえることができたことが、一番の学びであつたと感じています。触診、打診、聴診する場所、針

を刺す場所は、いったいどのような構造になっているのか、教科書や画像をもとにして自分が思い描いた平面のイメージとは違って、立体的なイメージを持つことができるようになったと感じています。例えば、臓器と臓器が重なり合っている箇所や、側面や背面からどれくらいの距離に臓器が位置するのかを実際に目で見て確かめることができました。臓器だけでなく、皮下脂肪、筋肉、腱、骨、神経や血管が全身に張り巡らされていること、そのすべての機能がその働きを全うできている状態が健康な状態であることをあらためて理解することができたと思っています。

あるご遺体の先生は、両脚の膝に人工膝関節を入れていました。その先生の脚の筋肉、臀部の筋肉はどの部分にも張りがあり発達していました。説明をしてくださった整形外科の先生が、「この先生は、ご自身が献体になるから最期まで元気でいたい、と思って運動されていたのではないかと思います」とおっしゃいました。人の身体には、その人の生き方が現れるのだと気づかされました。私は医療者になった時、人々の身体を見て、

その人の生き方も理解できるようにになりたいと思いました。看護において患者に寄り添うとは、その人の生き方、価値観、意思に寄り添うことが含まれると思っています。それを、身体を通して理解し、より良い看護実践につなげていきたいと思っています。

解剖見学を終えて

山崎 遥菜

千葉白菊会の皆様、今回は千葉大学の解剖実習、解剖見学にあたり、ご献体していただいたことを心より感謝申し上げます。

今回私は、物心ついてから初めてご遺体を目の前にしました。というのも、一歳のころに祖父を亡くしており、葬式には参加しているためご遺体を見たことはあるのですが、記憶には残らず過ぎしてきました。形態機能学実習の授業で解剖見学があるというのを知り、初めてヒトのご遺体を目の前にするということへの緊張感と、ヒトの構造を肌で実感できることへの好奇心がせめぎ合って、複雑な



感情を抱いて
いました。

いざ人体を
実際に観察
すると、教員
の先生がおっ
しゃつていた
ように、それ
まで教科書の
図やイラスト
で学んだ構造
や、学んだこ
とによって自
分の中に持つ
ていたイメー
ジとは全く異

なるものでした。すべての部位、臓器、構造一つ一つがつながっており、ヒトの生命をつなぐうえで重要な働きをしていることを強く感じました。動脈はとても太く、全身へ十分な血液を循環させていることを視覚や触覚から十分に理解することができました。また、尿管が思っていた何倍も細く、尿路結石がいかに危険なものなのか容易に想像することができました。授業に参加してくださった先生方

も、「看護師でこの臓器に触れる機会はめったにないよ」とお話ししてくださり、本当に貴重な経験をしているというのを実感しました。教科書では学ぶことのできない現実味を感じることができ、人体を立体像としてとらえることができました。

貴重な経験をさせていただいた一方で、自分自身の知識不足も強く感じられました。今まで試験を乗り越えることを第一優先で勉学に取り組んでいたことを、強く後悔する時間でもありました。先生方から臓器や細かい疾患に関するお話を聴く中で、看護を提供するうえでは患者さん一人ひとりの体の内部で起きていることを、構造まで想像して理解できる状態でないと、患者さんの全体像をとらえてアセスメント※することは、不可能であると思いました。今回の経験を通して、今後はより一層気を引き締めて勉学に励む必要性を肌で実感することができました。夏に行われる基盤実習をはじめ、多くの実習を通して多くの患者さんと実際に関わっていくことになりました。教科書にある文字や図をただ読んでいくだけでなく、立体的に構造を想像し、患

者さんの体の中でどんなことが起きているのか、どんなことが起こる可能性があるのかを常に考えられるように勉強していきたいと思います。

解剖見学で学んだこと、感じたことを絶対に忘れることなく、一人ひとりの患者さんへ適切な看護を提供していくことのできる立派な看護師になります。最後となりますが、献体として自らを捧げ、貴重な経験を与えてくださったご遺体の先生方、および献体に同意してくださったご家族の皆様へ、心からの敬意を示し感謝申し上げます。ありがとうございます。

※アセスメント……本人が訴える症状と検査データ等を理論的に分析し、優先度をつけること

私の転機

森 あさひ

私はなぜか小さい頃から人体の構造に興味がありました。小、中、高校と人体について扱った授業が行われれば、恥ず

かしい話ではありますが、ほかの分野とは比べ物にならないぐらい意欲的に勉強に励んだ覚えがあります。その興味をどうにか活かせないものかと考えた末に看護にたどり着き、晴れてその卵になることができました。そうして人体に関するスペシャリストになるための勉強が始まった訳ですが、一年と少し専門的な知識を齎っただけの未熟な私にとって、ご遺体の先生方の姿は未知のもの、といった感じがしました。これまで何よりも興味を持って勉強していたはずなのに、まるで初めてその概念に触れたような感覚になってしまいました。今まで私は作り物や平面上の虚像にしか触れてこなかったものですから、生きた証として存在する本当のご遺体に驚きや更なる興味を感じました。そして、何よりも本物に触れたという実感が、自身の大切な財産になったと強く思いました。

私たちが大学を卒業し、相手にするのは実際の患者さんです。しかし、教育を受ける段階では、なかなか実際の患者さんに触れる機会はありません。演習をしていても相手役は顔見知りの友達なものですから、必要な緊張感というものが今

まで欠けていたように思います。ですから、今回先生方の体に触れて感じる、学ぶということとは、私に緊張感を覚えさせてくれた本当にありがたい機会だったのです。またそれと同時に、私は医療者として現場に立つ人間になるのだということとを再認識させていただきました。

「献体」という言葉は、「体を献げる」と書きます。献げるというのは、目上の人や神に物を差し上げるという意味だそうですね。先生方は、私たち学生の教育のために献体してくださっているわけですが、私たちは神でも先生方から見ても目上の人間でもありません。それなのに、どうして「献体」と書くのか。私はこのことに関して、私たち学生の将来に数えきれないほどの可能性があり、その可能性に価値があるからだと思うのです。立場の話ではありませんが、私たちの目指す世界にはきつとまだ開けられていない、けれど開けられるべき無数の扉があります。その扉を開けられる可能性を、私たち学生は秘めているのです。ですから、この経験をさせていただいたからには、そして先生方に背中を押していただいたからには、怠けてはいられないと思うのです。

先生方からいただいたこの経験を、自分の内にしまっておくだけでは、献体していただいたことに対してあまりにも薄情なように思います。最大限の感謝にするために、先生方の想いがほんの少しでも無駄にならないようにするためには、いただいた経験をこれからの自分に活かすことが第一であると感じました。十分に活かせるよう、これからの勉学により一層励みたいと思います。

最後になってしまいましたが、今回このような機会をくださった千葉白菊会の方々、ご遺体の先生方、そのほか関係者の方々、貴重な経験をありがとうございました。



ご遺族様からの メッセージ

解剖慰霊祭にお越しいただいたご遺族様からもメッセージをいただいております。
ご献体いただいた故人様とご協力いただいたご遺族様には、重ねて感謝を申し上げます。

匿名希望

最愛の妻の遺体を献体に供しました。
彼女の生前に話し合い、承諾も得ておりましたが、いざ遺体を献体する段には、やはり躊躇するものが無かったと言えは嘘になります。

私は長く医療用画像診断装置メーカーに勤務し、その製品を海外の納入先の病院に、設置やメンテナンス、操作指導のために訪問し、機器を操作する技師・医師の意見や希望を自社にフィードバックする業務に就いていました。画像処理技術の進歩は目覚ましく、そのハード、ソフト両面からの発展で、素晴らしい画像を提供出来るようになりました。しか

し、これらの画像はいかに鮮明でも、あくまで二次元、あるいは三次元の「画像」でしかありません。臓器の重さ、柔らかさや色合いなどや、隠れた患部の情報取得には限界があります。やはり人体そのものを解剖して、実際の臓器や患部を肉眼で、あるいは手に取って感じなくては、真の実態情報は把握出来ません。



この正確な実態情報の把握は、現場で疾患の治療や研究に当たる医師たちの必須条件です。その意味で、献体は重要という哲学を、業務を通して得ていた次第。この私の意見に、故人も生前賛同してくれたのです。もし故人に魂があるのなら、遺体を献体に供した行為を理解し、賞賛してくれていると思います。

医学の進歩を目指す先生方、どうか我が愛する妻の献体から得られた情報を、有効に使ってください。切にお願いいたします。



深山 ゆかり様

両親が六十代の頃に、「自分たちの最後をどうするか？」についての相談をされました。その時、両親そろっての意見で「献体へ出してほしい」とのことと、登録のための用紙にサインと捺印をして欲しいと言われました。その時は人間の死について深く考えていなかった私にとっては、死について準備するのは早すぎるのでは？と思っていました。元気で過ごしている両親からは死ぬことの想像が来ず、すぐにサインするにはとまどいがあったのを覚えています。

しかし、両親が「献体」を自分たちの最後の選択にしたのは、「人として最後に誰かの役に立つことが出来るのならば、自分たちの身体を使って欲しい。これからの医学の発展と医療に携わる若い人たちの役に立つのならば、このような選択があっても良いと思う。」これが両親の終わり方の考えでした。

自分たちの死について、深く考えることはなかなか無いことです。死が近くなつて、あらためて自分の人生を振り返り、最後をどうするか、どうなるかを考えるものではないか、と思うのですが、こうして両親が元気なうちに、人間の最後、家族として親の最後をどうしたのかについて話し合えたことは、今となつては大変良い機会だったと思っています。父も母も最後の選択が決まっていたので、家族としても、迷うことなく送り出す心の準備も出来て、とても良かったですと思います。人の死について話すことなど、してはいけないという固定観念がありますが、家族としてはとても大切なことであり、親の気持ちを元気なうちに聞くこと、家族として受け止めることな



ど、「親の出来る最後の生きた教育」をしてくれたことに感謝しています。

最後に、解剖慰霊祭では医学を学ぶ学生の姿を見ることが出来、また敬意と哀悼の意を払っていただきありがとうございます。人の痛みの分かる、地域医療、また国内、外にて活躍出来る医療者が増えることを願っています。

令和五年度 千葉白菊会活動報告

令和五年

六月三日 第九十六回千葉大学医学部解剖慰霊祭に参列

八月六日 「令和五年度 献体の集い」を

八千代市・勝田台文化センターにて、千葉大学医学部と共催

九月二十二日 秋の彼岸供養参列

十月六日 解剖実習ガイダンスに出席

令和六年

一月二十四日 納棺式後の献体の碑献花

式に参列

三月二十七日 献体の碑名簿奉納式執行



解剖実習ガイダンスにおける大澤前会長



献花式における青柳副会長（当時）



大澤前会長による献体者の名簿奉納

千葉大学医学部では献体登録者を募集しています。献体に興味がある方は、千葉白菊会までお問合せください。



千葉白菊会ホームページ

<https://www.m.chiba-u.jp/dept/shiragikukai/>

電話 043-226-2988

(月～金の9時から16時まで)

メール shiragiku@chiba-u.jp

郵便 〒260-8670

千葉市中央区亥鼻1-8-1

千葉大学医学部内



お疲れ様でした😊

左より小宮山教授 大澤前会長 森千里 医学部教授

二〇一〇年より十四年間の長きに渡り千葉白菊会会長の務めた大澤國昭氏が、令和五年度をもって勇退されました。また、千葉大学の解剖学教育を長年担当された小宮山政敏看護学部教授が、このほど定年を迎えられました。献体運動を支え、また多くの医師・医療者を世に送り出したご功績に心より感謝を申し上げます。

白菊の広場

一 私と献体 一

令和五年度に入会された方は、百六十一名の多くを数えました。その方たちの中から、入会の決意表明をご紹介します。

◆これから助かる命のため

千葉市稲毛区 中島 恵美子様

初めて献体のことを知ったのは、義母の知り合いの方が亡くなり、献体をされていたと聞いた時で、二十代後半の頃でしたが、その時はあまり深く考えることもなく、忘れていた時期もありました。昨年の秋に甲状腺の手術を受け、入院中に献体の掲示を見たのをきっかけに、また考えるようになりました。とても信頼できる先生に担当していただけて、自分でも不思議なほど手術に対する不安はありませんでした。

そのような先生方や、医師を目指している学生さん達が技術を向上させるためには、実際に人体での練習を重ねること

も必要だと感じました。私も助けていただきましたが、これから助かる命のためにも役に立てるのであればという思いから、献体を希望しました。

◆死後に社会貢献が出来る

千葉市花見川区 中川 俊雄様

年齢も七十三才となり、終活に関する本を読んでいたところ、ある本に死後に社会貢献が出来る方法のひとつとして医学部への「献体」というものがあり、「献体運動」を推進していて、医師や医学生の研究、学習用に遺体の提供を呼び掛けていることを知りました。

この年齢に至るまで、様々な病気やケガを経験してきましたが、医療機関の方々のおかげで全て克服することが出来ました。しかし世の中には、まだまだ難病や不治の病に侵されて苦しんでいる方々がたくさんいらっしゃいます。医師や医学生の方々の研究、勉学の向上に寄与し、こうした病の絶滅に自分の身体がお役に立てば、この上ない喜びを得られると考え、献体を希望しました。

◆健康で平和で幸せな未来を

船橋市 大久保 美枝子様

私自身、亡き両親から丈夫な身体を授かり、そして今まで波乱万丈、辛く絶望の時もありましたが、振り返れば楽しかったことばかりが思い出され、私としては幸せな良い人生を過ごさせて頂いたと感謝しております。

まだしばらくは元気でいるつもりですが、自分の意思を表明できるうちにといい、最後の時は社会へのお礼として、これからの将来のため、勉学に励んでいる若い医学生たちのお役に立てるならと、献体登録を希望致しました。

今年七十歳になり、身内や知人の訃報も多くなり、自分の死後を考える機会にもなりました。これからもっと医学が発達し、子供たち、孫たちの未来が健康で平和で幸せな未来であるよう、心から祈るばかりです。どうぞ宜しくお願い致します。



◆若き諸先生方へ

千葉県美浜区 穴原 博様

今日まで人生七十五年の間、世の為人の為に然したる功績もなく、私益のみの人生でありました。死に際し、ただ火葬にする事の無意味さを思い、この身を若き医学生のために有効にして頂く事で、有意義ならん事を切に願ひ決意しました。

～中略～

そして、この献体を妻、長女、長男の三人の心よりの賛同を受けられた事、有難く感謝します。さらに元千葉医科大学学長小池敬事先生の第一解剖学教室の門下生であった小生の父・政男陸軍軍医並びに祖父・万平陸軍軍医も共にあつぱれとあの世で出迎えてくれる事と思います。

令和五年四月十二日現在七十五才

献体候補者 穴原 博

昭和二十三年九月四日生

若き諸先生方

御存分に。



◆1ミリでもお役に立てたら

山武市 高松 鐵郎様

生老病死 人生には必ず訪れる死

今の私も例外ではなく、その一歩手前にあります。我が人生を振り返る時、自分は社会の為何をしたのか……ともすれば、自分の事で一杯いっぱいだったのかも知れません。

そんな日々の中、新聞のコラムに献体が不足している旨書かれた記事が目にとまり、これだ!!と応募

した次第です。1ミリでもお役に立てたら、幸甚に存じます。

(令和六年一月二十七日成願されました)



一 会員からのお便り

千葉県若葉区 富田 正一様

何時も私達会員の事、お気遣い頂き有難く思っています。おかげ様で、先々の事を考えずに毎日を過ごしています。今八十五才ですがまだ元気に外出出来る事を喜ばしく思っています。

先日、四年ぶりに白菊会の勝田台に出席しましたが、私より年上の方は、少なくなつたように感じました。

今後共、宜しくお願いいたします。

大網白里市 連 光代様

私達の老人会に、市の包括センターの職員の方が来て下さり、色々勉強して居りますが、今回献体のお話をしてくださいましたので、私は五年前に息子達と話し合つて献体の了解を得ていましたので、職員の方にお話をしましたら、千葉大は千葉白菊会に入会することになつてゐるとのこと、すぐに電話番号を調べて下さいました。

帰宅してからお電話をして、書類を送つて下さいましたので、息子達に送つて署名・捺印してもらいました。無事に書類を返送して、ほっとしました。会報五十九号を読ませていただき勉強になりました。

これからも色々お世話になります、よろしくお願い申し上げます。有難う御座いました。

千葉市若葉区 飛世 洋子様

昨年入院中に親友の死を知りました
誰もが一度だけ体験する運命ですが……
多分、当人よりも辛い事でしょう
皆様もどうぞ
ご自愛なさって下さい

天国に住所があったら

北の野原に咲くスズランの花送ります
無邪気でお茶目なその姿
眞赤なルージユを添えて

夏空の下、香しき穂にかみついて
はじけた笑顔、満面に
一緒にかじった黄色いトーキビ

懐かしい古里、十勝川
母なる大地を流れて太平洋
銀色に踊る秋味送ります

北国のしばれる冬の訪れに
ぬれたセーターに涙した
あなたの好きだった
眞赤なコート送ります
天国に住所があったら



若

さは

人生の一時をいうのではない

それは心の状態をいうのだ
逞しい意志 優れた想像力
炎ゆる情熱

怯懦を乗り越える勇気
安逸を振り切って
冒険に立ち向う意欲

こおいう心の状態を
いうのだ

人は信念と共に若く

疑惑と共に老ゆる

人は自信と共に若く

恐怖と共に老ゆる

希望ある限り若く

失望と共に老い朽ちる

サミュエル・ウルマン

船橋市 的場 佐次郎様



お知らせ

- 転居された場合は、必ず千葉白菊会までお知らせください。毎年、住所不明の方が多数出て困っております。万一の時の連絡者の方に変更があった場合も同様です。

電話 043-226-2988 (月～金の9時から16時まで)

メール shiragiku@chiba-u.jp

郵便 〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1 千葉大学医学部内

- 「2025年版献体手帳」をご希望の方は、登録番号 氏名 住所を明記のうえ、ハガキかお手紙をお送りください（ホームページ内から申込用紙を印刷することもできます）。

Q 献体をするときのご遺体に何を着せたらいいですか？また、棺は必要ですか？

A 特に決まりはございませんので、普段の寝間着等でお送りください。お棺はご準備いただいても、移送の際お引き取り出来ませんので必要ございません。

Q 献体後、遺体との対面は可能ですか？

A 申し訳ありませんが、大学への移送後はご遠慮頂いております。

Q 遺骨が返還されるまでの期間はどれくらいですか？

A ご遺体をお預かりしてからおよそ2～3年、お待ちいただいております。ただし、解剖の目的によっては、1年前後で解剖が終了することもあります。ご遺骨は、千葉大学の「解剖慰霊祭」におけるご遺骨返還式にてお返しいたします。解剖終了後、ご遺骨返還の目途がつけましたら大学より連絡いたしますので、慰霊祭前のご返還も可能です。

Q 大学まで遺骨を引き取りに行くことが困難なのですが。

A ご遺骨は、日本郵便のゆうパックでのみ郵送が可能です。ご依頼いただければ郵送いたしますので、千葉大学亥鼻地区事務部総務課総務第一係（043-222-7171 内線5017）までご連絡ください。

Q 献体後、遺骨を大学ですずっと預かってもらえますか？

A ご遺骨の保管場所がないため、必ず返還させていただいております。

Q 遺骨を灰にして返してもらえませんか？

A ご遺体は火葬後千葉市斎場の取り決めにより、ご遺骨の状態にてお返ししております。一度骨壺（高さ24.5cm×幅21.0cm）に納骨されたご遺骨を、あらためて粉骨作業を行って散骨などをする葬儀社もごございますので、そういった葬儀社へご相談ください。

Q 返還される遺骨に他人の遺骨が混じることはありませんか？

A 解剖実習は初めから終わりまで同じご遺体を同じ学生が担当し、他のご遺体と混ざることはありません。実習は指導教授のもとで終始真剣に整然と実施されており、学生の皆さんは感謝の念を込めて丁寧にご遺体に接しています。また、医師が解剖する場合においても、他のご遺体と混ざることは無いようなルールで実施しています。

解剖の終わったご遺体は一体毎にお棺に納められて火葬に付されますので、他のご遺骨が混じることは絶対に起こりません。どうかご安心ください。

Q 解剖後の供養はどうされていますか？

A 千葉大学医学部主催で、「解剖慰霊祭」が毎年6月頃に無宗教で実施されます。ご遺族の方々のほかに、千葉白菊会々員、医学部・附属病院等の関係職員、医学部・看護学部の学生等の参列のもと、一人ひとりが祭壇に白菊の花を捧げ霊を弔っております。また、千葉大学医学部の霊堂が千葉市の千葉寺にあり、毎年春秋の彼岸に医学部関係者や千葉白菊会役員等がお参りしています。

Q 献体登録者が旅先や県外の病院で死亡した場合、献体できますか？

A まずは千葉大学献体受付専用番号：043-226-2504（千葉大学医学部献体活動協力事業者 サンセルモ玉泉院）へご連絡ください。いつどこで天寿を全うされるか、誰にもわかりません。その意味からも、いつも献体登録証（小）をご携帯いただきたいと思います。

献体について（Q & A）

ご質問は → 千葉大学亥鼻地区事務部総務課総務第一係 献体担当（043-226-2988）

Q 住所や連絡者が変わったらどうすればよいですか？

A 住所だけでなく、電話番号や会員証（小）の裏面にある縁故者（連絡者）等の変更がある場合、できるだけ早く 千葉大学亥鼻地区事務部総務課 総務第一係献体担当 にご連絡下さい（043-226-2988 月～金 9時～16時※祝日は除く）。また、献体登録証を紛失された方も再発行いたしますのでご連絡ください。

Q 千葉県外へ転居したらどうなりますか？

A 千葉大学では、ご遺体のお迎え可能地域を千葉県内とさせていただいております。県外へ転居された場合は、千葉大学亥鼻地区事務部総務課 総務第一係 献体担当 へご連絡願います。登録の継続ができない場合は、登録取消のお手続き、あるいは転居先地域の献体登録団体の問い合わせ先をご案内いたします。また、県外の病院等でお亡くなりになった場合は、ご遺体のお迎えができないことがございます。

Q 登録後、状況や心境の変化により登録を取り消すことができますか？

A もちろん、ご本人の意思により登録の取り消しは自由に出来ます。千葉大学亥鼻地区事務部総務課 総務第一係 献体担当に取消願をご請求いただくか、氏名、献体登録番号、取消理由を記入し（書式は問いません）、献体登録証（小）を同封のうえ郵送にてお届けください。献体登録証紛失の場合は、紛失の旨ご記入いただければ結構です。なお、ご本人による書面での意思確認が必要なため、お電話のみでの受付はできません。

Q 献体登録者が死亡したとき、どうすればよいですか？

A まず、できるだけ早く千葉大学献体受付専用番号：043-226-2504（千葉大学医学部献体活動協力事業者 サンセルモ玉泉院）へ連絡してください。365日・24時間受付しております。ご連絡頂いた際に、お迎えの日時を相談いたします。

Q 遺体はいつまでに大学に引き渡せば良いですか？

A 早ければ早いほど内臓の保存が良い状態での解剖が可能になります。具体的には、死後48時間以内のご遺体が最も多くの目的の解剖に適しており、大部分の登録者がこの時間内に搬送されています。72時間（3日間）を超えると、解剖の目的がかなり制限されてきます。120時間（5日間）を超えた場合は、お引き受けをお断りさせていただく場合があります。なお、ドライアイスをお棺に入れる場合は、ドライアイスがご遺体に触れないようにお棺の四隅に置いて下さい。アイバンクに登録されている会員は、6時間以内の眼球剖出行為がありますからご注意ください。

Q 死亡したときの状態によって献体できなくなることがあると聞きましたが、どんな場合ですか？

A 交通事故や墜落事故等、内臓破裂や血管損傷にいたる事故死の場合は、腐敗防止処置ができないので献体はできません。死後、臓器提供をされた方も同様です。また、事件や変死の疑いがある場合の司法解剖、特殊な病気や病気の原因・進行状況等を調べるため病理解剖を受ける方は、いずれも献体はできません。

Q 葬儀やお別れ会などのセレモニーをしてから移送でも良いですか？

A セレモニーの開催は可能ですが、大学としては少しでも内臓の保存が良い状態で解剖を学ばせたいので、できるだけ早いご遺体の移送をお願いしております。御通夜・告別式などは3日間以内を目途にお考えください。

ご家族の方々へ

1. 献体発生時の電話連絡

献体登録者がお亡くなりになりましたら、まず下記電話番号にご一報ください。千葉大学・千葉白菊会への連絡は必要ありません。以下の内容をお知らせください。献体登録時にお渡ししている連絡用カード（ブルーカード）をお持ちの場合は、参考にしてください。葬儀・告別式を行う場合は、日取りが決まりましたら再度ご連絡をお願いいたします。

電話連絡先（365日・24時間対応）

千葉大学献体受付専用番号：043-226-2504

（千葉大学医学部献体活動協力事業者 サンセルモ玉泉院）

もしも電話がつながりにくい場合は 043-301-9000（サンセルモ玉泉院稲毛会館）
050-2018-7168（サンセルモ玉泉院コールセンター直通）にお掛けください。

2. お知らせいただく内容

ご遺体を大学へお渡しいただく日時などについてお知らせください。

3. 献体手続きに必要な書類

- ①死亡診断書の写し……医師の死亡診断書をコピーしておいてください。（お迎えの際に必要となりますので必ずお迎えまでにご用意いただき提携の葬儀業者にお渡しください）
 - ②埋火葬許可証……市町村役場に医師の死亡診断書を添えて「死亡届」を提出すると交付されます。その際、火葬場所は「千葉市斎場」とご記入ください。
 - ③解剖に関する遺族の承諾書……献体お預かり後、郵送いたしますので、ご署名・捺印のうえご返送ください。返信用封筒を同封しますので、埋火葬許可証と一緒にご返送ください。
- 〈まとめ〉①の書類はお迎え時に葬儀業者に手渡し。

②・③の書類は後日大学から返信用封筒が届いてから大学へ郵送。

注意事項

- ※ 亡くなられてからお迎えまで数日間あく場合は、ご遺体が傷まないようご配慮ください。お棺にドライアイスを入れる場合は、直接ご遺体に触れないようお棺の四隅に入れてください。
- ※ 事故死（交通事故、れき死、水死等）や自殺の場合は献体できません。その他、お体の状態により保管のための処置が困難な場合にも、献体できないことがあります。

ご不明の点がありましたら、千葉大学亥鼻地区事務部総務課総務第一係にお問合せください。

（043-222-7171 内線 5017）

アイバンクにも登録されている場合

- ※ 登録者が亡くなられた際には、なるべく早く、まずアイバンク協会にご連絡ください。
平日 9時～17時 043-222-6803
土日祝日夜間 043-222-7171 ※電話交換手に「献眼を行います」とお伝えください。

その際、アイバンク協会に献体登録者であることを合わせてお伝えください。

（献体登録者はアイバンクへの提供は片目だけになります。）

その他、アイバンクに関する詳細は、アイバンク協会にお問合せください。

アイバンク協会への連絡後、あらためて大学へ献体の電話連絡をお願いいたします。